世間解　第三九五号
令和三年一月
発行　西法寺

念仏もうさるべし

―学仏大悲心（仏の大悲心を学ぶ）九―

新しい年を迎えました。何はともあれ一区切りであります。

今年もご本願のおはたらきの中「なんまんだぶ、なんまんだぶ…」とお念仏ご相続させていただきお念仏さまと皆さまにお育てをいただくことであります。何卒宜しくお願い申しあげます。

さて、昨年からお聞かせをいただいている梯實圓和上の西法寺での最期のご法話。今年も引き続いてご聴聞させていただきましょう。

『…　だから、仏さまの前では手放しをして全部お任せすること、それが信心だ。だから信心ってのはね、一遍心得たら、無くなるもんじゃないんだ。そうでしょ。おまかせしますってのは。任せたんだ。いつまで任せんねん、お浄土へ往くまで任せんねん。そうでしょ。今日まかして、明日になったら無いようになるなんてそんなん信心ちゃうで。ひとたび如来さまにおまかせいたしますと申したならば、その信心は臨終まで一貫して通っている。だからね、私が忘れても如来さまはわすれてくださらん。安心しておまかせをする。これが、浄土真宗の信心と言われるもんなんですね。だから、南無阿弥陀仏ということはね、法然聖人がおっしゃってるのはそういう意味。南無阿弥陀仏という声が聞こえたら、もう仏さまは「俺はお前を引き受けとるで、お前を引き受けてるから安心しろ」とおっしゃってるんだ。そう言われているんだから、一声一声安心を与えてくださっているんであってね、心配事を与えてくださっているんと違うんだから、安心したらええ。それを聞く。その如来さまの仰せをしっかりと聞くことですな。それを法然聖人はね「善信房の信心も、如来よりたまはりたる信心」、如来さまからいただいた信心だ。みなさんいただいてはりますわな。信心いただいた覚えないでと言われるかもしらんけれど、南無阿弥陀仏いただいているでしょ。結構やないか、それや。南無阿弥陀仏のことやねん、信心っちゅうのは。ちゃ～んと向こうから入ってくれてはる。そして、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。私の口を動かして、私の耳に聞こえてくださっている。それがお念仏ですよ。「われ称え、われ聞くなれど南無阿弥陀　連れていくぞの　親の喚び声」。こういう詩を詠んだ和上がいらっしゃる。私が称えて、私が聞いているけれど、南無阿弥陀仏っていうのは仏さまが一声一声、「お浄土へ連れていくでな、心配するなよ、安心して私に任せなさいや、何にも心配いらんでな」こうおっしゃってくださっている。そこで「左様でございますか、えらいご厄介おかけしまして申しわけありませんが、ありがとうございます」って如来さまにおまかせすりゃそれでいい。それが浄土真宗の信心っていうものだ。だけどこれはね、ともすれば信心っちゅうたら、自分がしっかりして、自分がはっきりならないかんと思いとりやすいんだ。何でかというと、そんなことばっかりこの世で習ってきたんだ。生れてくるとき、何にも知らんで生れてきたんだし、死ぬときは何にも知らんまま死んでいくんだっていうことをね、そんなこと誰も教えてくれなんだ。せやろ。はじめとおわりゼロでっせ。その代わりどんな学者であろうと、たとえノーベル賞もらっていようと、亡くなっていくときは置いていかなあかんで。そらそうや。昔の人はね、自分の本質はそういうもんだっていうことをしかっと見定めて、その上で生きていたんだ。ひとつひとつ積み重ねて、賢くなって、偉くなって、金積み重ねるように知識も積み重ねてと思ってただろうけどね、全部役に立たなくなる。覚えたことも知ったことも全部全部役に立たなくなる。自分の名前も分からんようになってしまう。その何にも分からんものを、黙って引き受けて、その何にも分からんものを、大事に育て育み、そしてお浄土へおくってくださるのは如来さまのお仕事だ。“いのち”は、仏さまにあずけておくことです。賢いとか、賢くないとかいうのはこの世でね、人間同士がワーワー言うて騒ぐだけのこっちゃ、あんなもん大したことない。ほんとの“いのち”になってきたら、人間には指一本触ることはできん。生れてくることも死ぬことも、人間の手の届かん話だ。その手の届かんところを、しっかりと見届けとくことです。…』

合掌